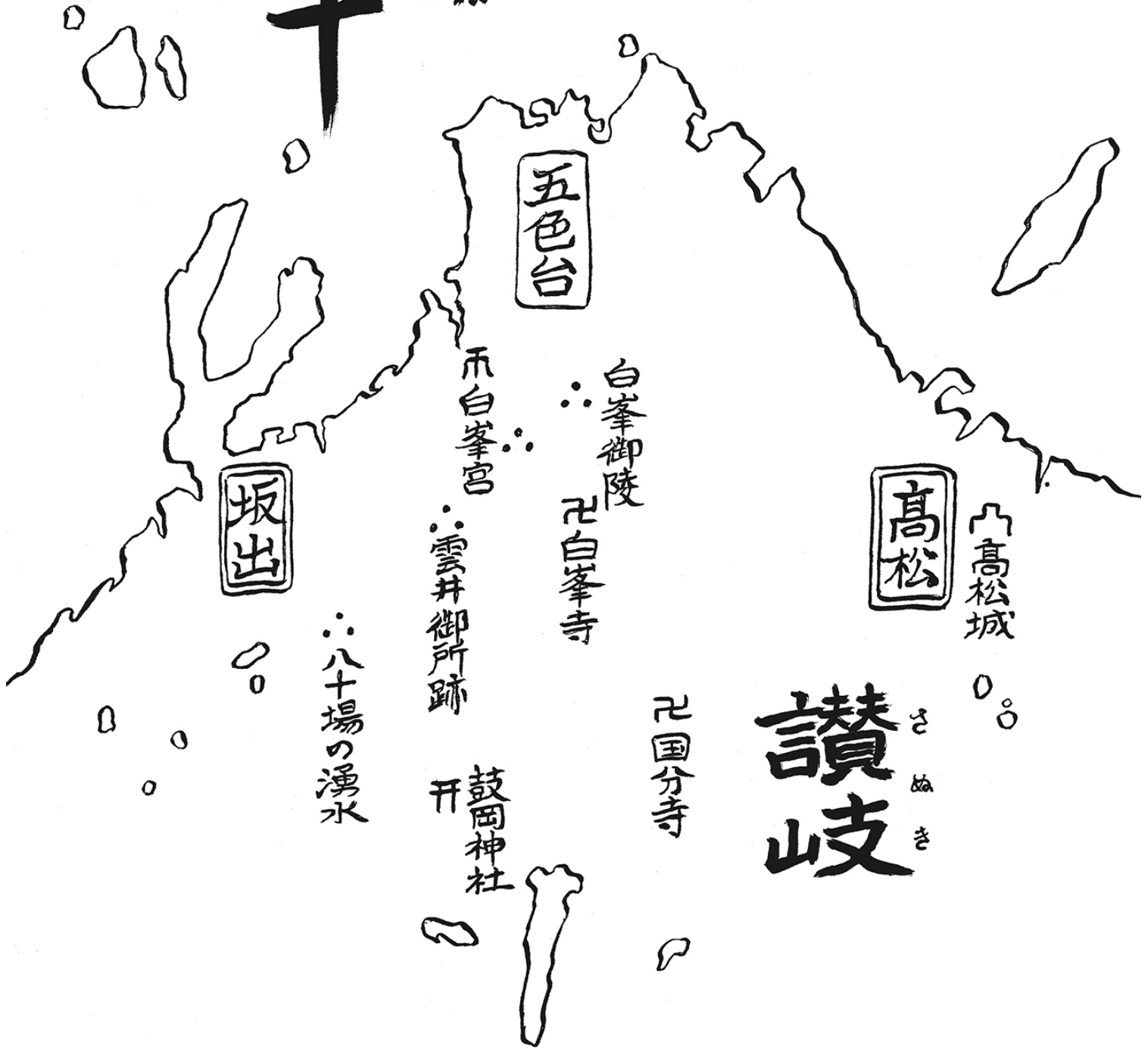


雨月物語 壺

白峯 しらね



五色台

白峯宮

白峯御陵

白峯寺

高松

高松城

讃岐 さいゆぎ

坂出

雲井御所跡

八十場の湧水

鼓岡神社

国分寺



不尽(富士)の  
高嶺の煙…



大磯小いその  
浦く(相模)



浮島が原に  
清見が関(駿河)



浜千鳥の跡ふみつくる鳴海がた(名古屋)



逢坂山の関守に  
東国への関越えを許されてから先  
秋の訪れた山々の紅葉も見過しがたく



塩竈(宮城)の  
和たる  
朝げしき



紫草艶う  
武蔵野の原



仁安三年(一一六六年)の秋  
葭が散る難波を経て  
須磨明石の浦ふく風を  
身に受けつつも  
訪ねたずねて  
讃岐(香川)の  
真尾坂の林に  
ひと時の草庵を結んだのは…



なお西国の  
歌枕に詠まれた  
土地をも  
訪ねたいと欲し



象潟(秋田)の蟹が苦や  
佐野(群馬)の舟梁  
木曾(信濃)の栈橋と  
心とどまらぬところもないが…



かみづきはじめ  
十月初旬

この里に近い  
白峰しろねというところに  
かの崇徳上皇の御陵が  
あると聞き…  
山に登る…

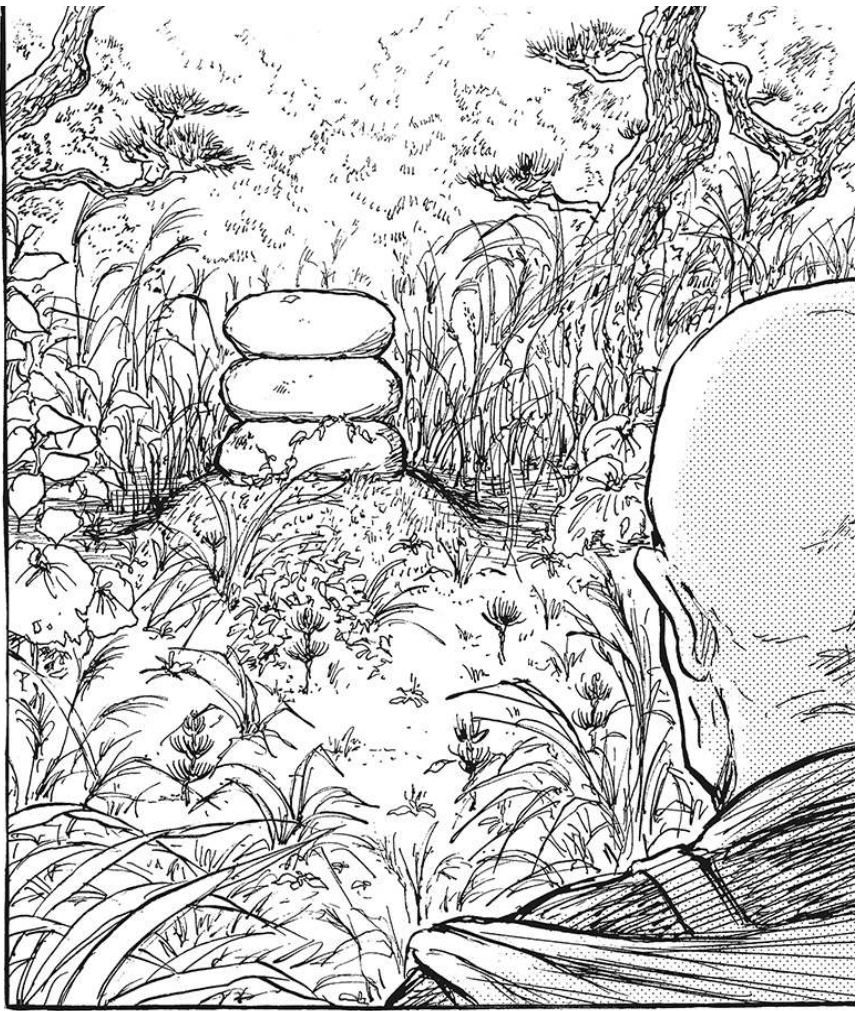


ただ遠き旅路の疲れを  
休めようということでもなく…  
仏道修得のためであった



これか…!!



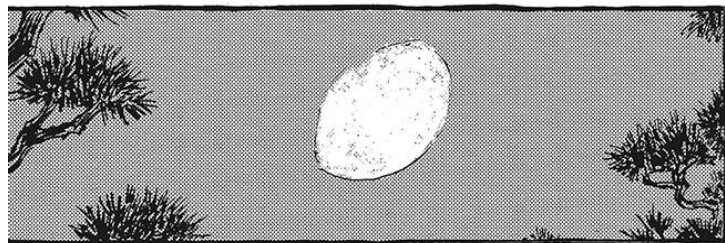


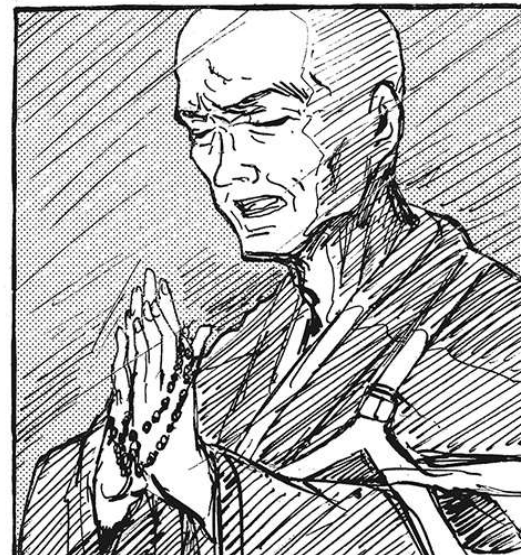
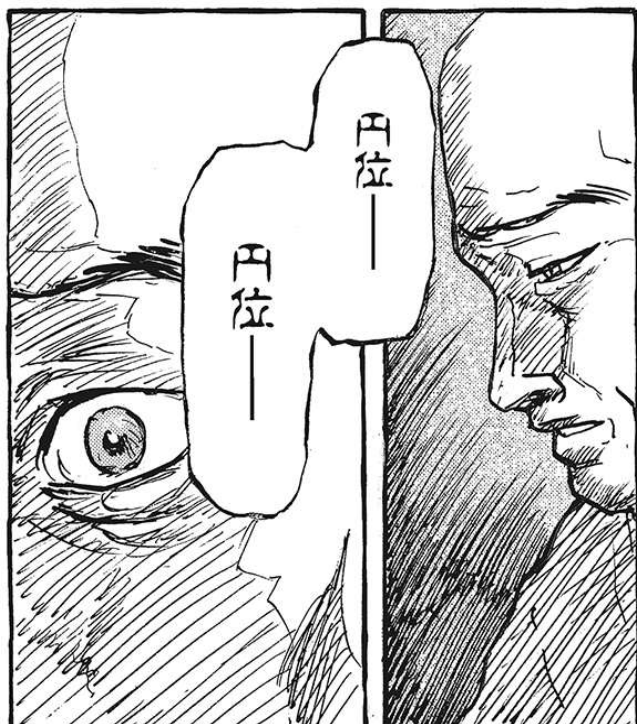
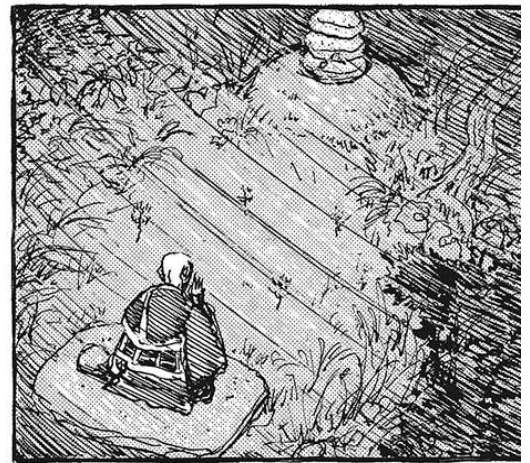
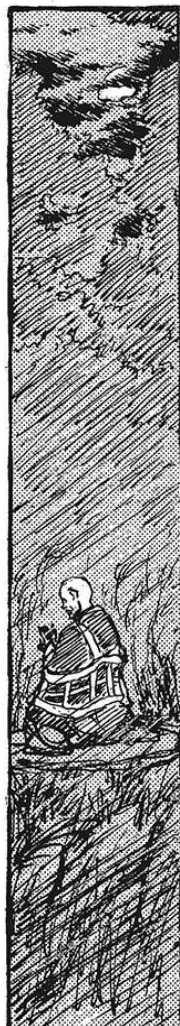
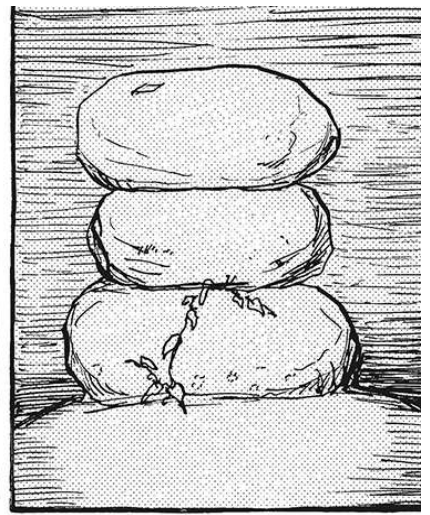
円位！

※西行法師の  
出家直後の  
法名



上皇様







…そこに  
来たるのは  
誰ぞ？

さきほどに  
おぬしの詠んだ和歌の

返歌をしようと  
姿を頭したのだ…

松山の浪にながれて  
こし船の

やがてむなしく  
なりにけるかな…

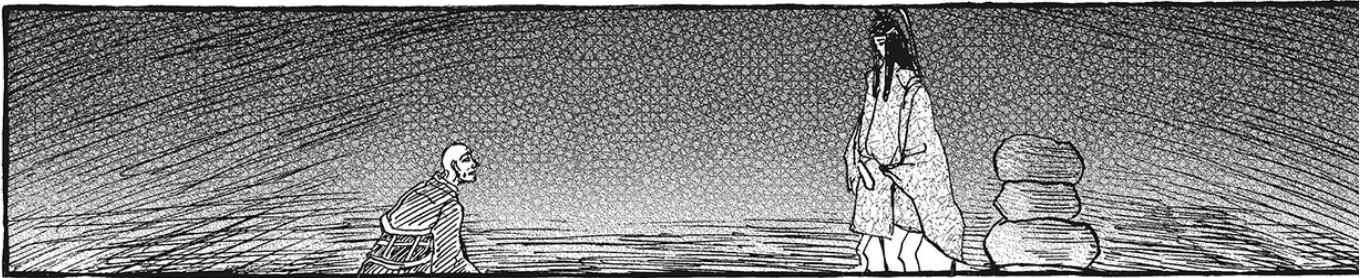


……  
上皇様  
——!



うれしいぞ

よく来てくれたな  
内位——



この濁世じよくせを  
去られたことを  
うらやましく思い……  
だからこそこうして  
ご供養致しました  
のに……悲しゅう  
ございますぞ!!



……  
お姿を顕あらわして  
下さったことは  
うれしゅう  
存じ上げます





クハハ…ッ

クッ…



どうかひたすらに  
現世への妄執を  
絶たれ——  
満ち足りた仏の位に  
おのぼり下さい  
ませ…！



近頃の  
世の乱れは  
全て朕が為した  
事なのだ!!



お前は何も  
知らぬのだな…！



…なんとという  
浅ましい御心！  
ご聡明なる御君  
ならば：  
王道のなんたるかは  
十分にご存知のはず  
ではございません  
か！



朕はまだこの身が  
現世に生きてありし  
日から魔道に  
心を打ち込んで  
平治の乱を  
発さしめ——  
死した後の今も  
なお朝廷を  
祟っておるのだ！

見ておるがよい  
やがて天下にさらなる  
大乱を起こして  
みせようぞ!!



内位：いや西行！  
ならば聞け！  
帝の位とは  
人間最上の位である！  
その帝が  
人道を乱すこと  
あれば：天の命  
民の望みに従って  
是を討たねばならぬ！！



試みに  
お尋ね申し  
上げます！  
そもそもあの  
保元の乱での  
ご謀叛は：  
天つ神の理に  
違うことなしと  
思われて為された  
ことですか？！  
それともご自身の  
欲望のために？！

はつきりと  
お聞かせ  
下さい！！



その体仁が  
早逝した時には  
次の帝には  
朕が皇子  
重仁と誰もが  
鬼った！  
それが美福門院の姫みに  
妨げられ：第四皇子の雅仁に  
代を奪われたこの恨み！！



そもそも  
永治元年：  
何一つ落ち度も  
ないのに  
父帝のお言葉を  
慎んでお受けして  
わずか三歳の  
体仁に位を譲った  
朕が心を——  
欲深いとは誰も  
言えまい！



そこまで  
されてもなお！  
父君がご存命の  
間は子として  
孝行の道を守り  
決して顔色一つにも  
あらわさなかった！  
だがご崩御された後は  
いつまでもこのままで  
いてはいかんと——  
心を鬼にして兵を  
挙げたのだ！！



重仁には  
国を治める  
才があった！  
日継を選ぶに  
備わる徳も  
考えず——  
後宮の牝鶏との  
相談一つで：  
どう見ても器ではない  
雅仁と決めたのは  
父帝の過失であろう！

臣下の者が君主を討つ  
ことですら天命民意に  
かなってさえおれば  
周王朝八百年を開く  
基ともなった!

ましてや朕は  
元々帝位にあった  
身の者!  
女后風情の口出しが  
国政を左右する  
このゆがんだ時世を  
正さんとする行為を  
非道などと言われる  
筋合いはない!

きさまこそ…  
現世の煩惱から  
逃れたいばかりに  
妻子もろとも  
家を捨てて  
仏道などに  
おぼれおった  
その身の上で…

人道論を因果話  
にうまくこじつけた上に  
儒教の鬼想を仏教話  
に混入し…よくぞ朕に  
説教したものよ!!



君主の仰せは  
人道の理を  
語るように見せて  
その実私欲から  
逃れられては  
おりませぬ!

何イ?

わざわざ遠き唐土の例を  
引くまでもなく…我が国でも  
かつて誉田の天皇(応神天皇)が  
兄皇子大鷦鷯の王をさしおいて  
末弟の菟道の王を日嗣の太子と  
為されたことがあります!



応神天皇  
ご崩御の後  
兄弟は譲り合って  
帝位につかず…  
三年を過ぎてても  
解決がつかないのを  
憂いて…ついに  
菟道の君が  
自らの命を断ったので  
やむなく兄皇子が  
即位されたのです

これこそが天皇としての  
あるべき姿であり  
忠孝を尽くした無欲の姿…  
堯舜の教えそのものであると  
申せましょう！

我が国で儒教を重んじて  
王道の助けとするのは  
この菟道の王が百濟から  
王仁をお召しになって以来  
始まったことなれば…  
この兄弟王の御心が  
古代中国の教えと重なるのも  
当然のことでありましょう

さらに言わせて  
いただければ…  
先ほど君主の  
引用されたのは  
「周の創め武王が  
殷の紂王を倒したのは  
臣下が君を殺したのでは  
なく仁義のない男を  
罰したに過ぎない」という  
『孟子』なる書の一節に  
ございましょうが…

他のあらゆる  
有用な書物が  
あまねくこの日本に  
渡っている中で  
唯一この書のみが  
海を渡って  
おりません！  
それはいったい  
なぜか!?

開闢以来  
万世一系の天皇が  
治めてきた  
この国には—  
たとえ大陸では  
聖なる教えと  
なり得ても  
決して国ぶりに  
合わぬ内容で  
あると…

八百万の神々が  
この書を積んだ船を  
ことごとく神風で  
沈めてこられたから  
だと聞いております！

それに唐土においても  
『詩経』の中では  
「兄弟はたとえ内で争っていても  
外から攻められた時は協力して  
これを防げ」と書かれている  
ではありませんか…!

……



それを：  
肉親の愛も忘れられて  
あまつさえ殯の宮で  
お父君のご遺体の肌が  
まだ冷えきらぬうちから  
軍旗をかかげて弓を引き  
皇位を争われるなど：  
これよりひどい不孝の罪が  
ありましようや!?

皇位とはまさに  
神の決めたもう器!  
たとえ重仁親王の  
御即位を民が望んで  
いたとしても——  
私情をもって道ならぬ手段で  
奪おうとなされれば  
人の心も離れ：ご本意を  
遂げられないのも  
当然の結果かと!

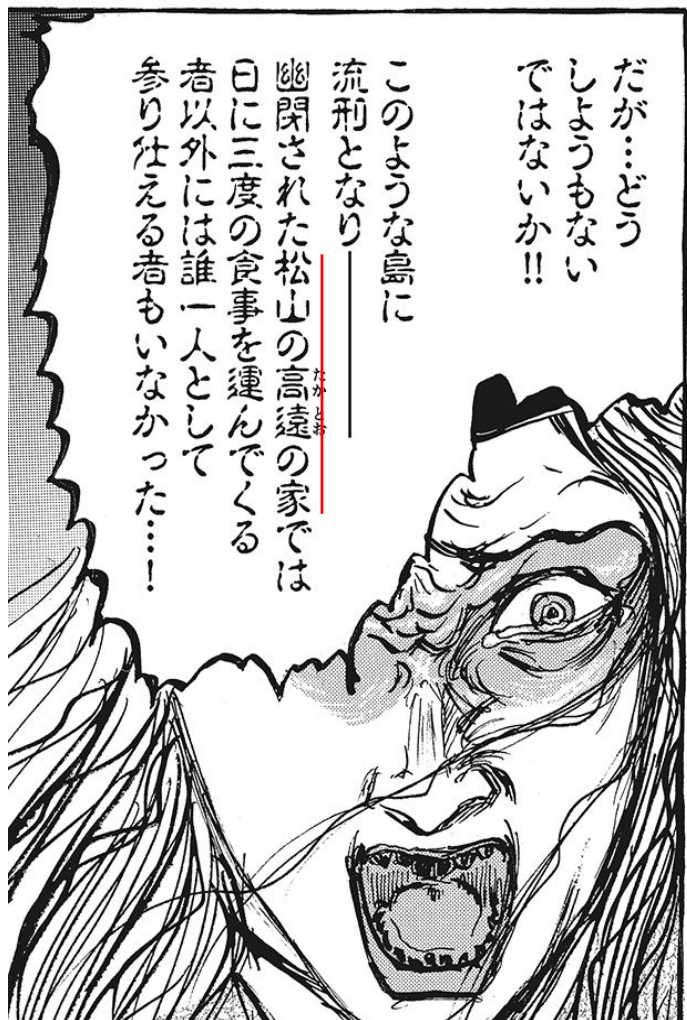


成仏  
されて  
下さい  
!!

どうか：  
ひたすらに  
過去の恨みは  
お忘れになって



だからこそ  
果てはこのような  
辺鄙な地の土とも  
なられたのです

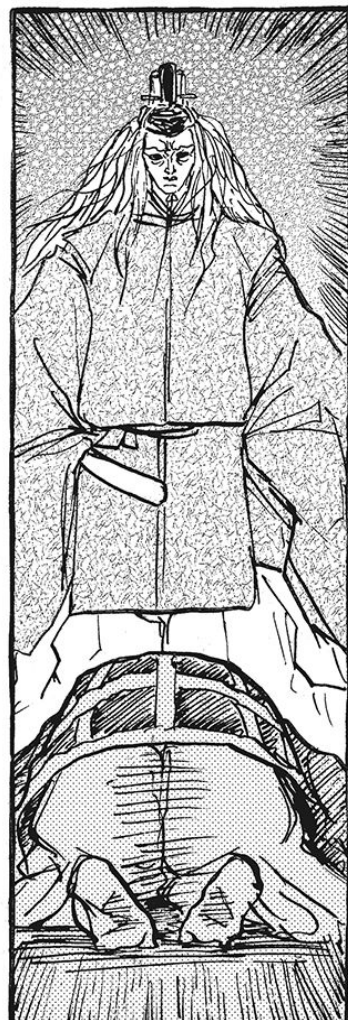


このような島に  
流刑となり——  
幽閉された松山の高遠の家では  
日に三度の食事を運んでくる  
者以外には誰一人として  
参り仕える者もいなかった……!

だが：どう  
しようもない  
ではないか!!



今：きさまは  
あるべき正しさを  
論じて朕の罪を  
問題とした：  
そこに道理がないとは  
朕も言わぬ





ならばせめて  
来世の救いにすがろうと…  
頭をまるめて—  
五部の大乘経を写したものの  
寺もないこの荒磯にただく  
置いておくのも悲しすぎる

たとえ烏の頭が白くなるうとも  
私には都へ還る期もなく  
海辺で死霊となる他ない!



夜空の雁の声を  
聴いては  
都に行くのかと  
懐かしく思い…

夜明けの千鳥が  
浜辺で騒ぐのに  
心をゆさぶられる



せめて自らの  
筆跡だけでも都に  
入れて下されと…  
仁和寺の弟の許へ  
和歌を添えて  
送ったものだ!

浜千鳥  
跡はみやこへ  
かよへども  
身は松山に  
音をのみぞ鳴く



これほどに…  
これほどに  
深い恨みが  
あるものか  
!!



それを…  
それをあの  
少納言信西の奴めが…

もしや…  
崇徳上皇の  
呪詛の心が  
こめられて  
いるやも  
しれませぬ!

くだらぬ邪推で  
後白河院に上奏  
しおったがために…  
経はそのまま送り  
返されて来た…!!



この世界には  
国と争って  
敵味方となった  
兄弟など  
いくらでもいる…

それでもなお!!  
朕は罪を認め…  
悪心懺悔の爲にと  
一生けん命に  
写経したのだ…

それを…それを…!!

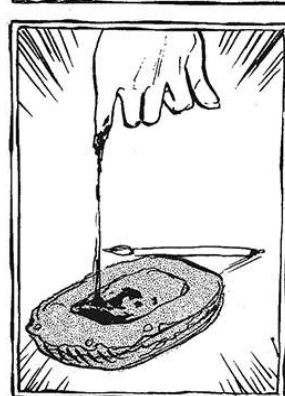


この経を  
魔道にささげ…  
朕が恨みを  
晴らす!!

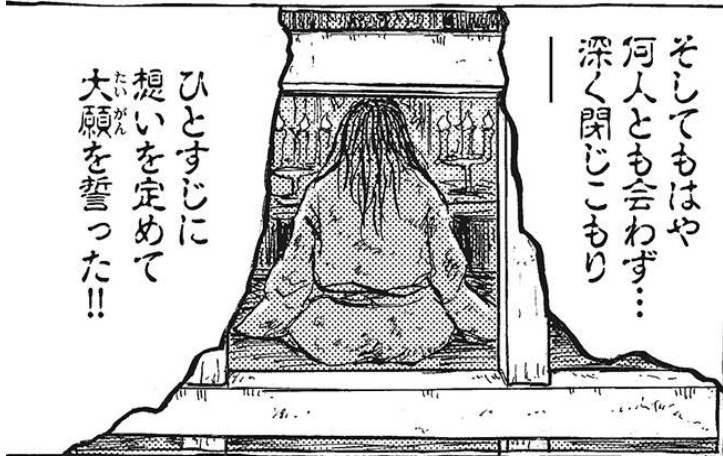


そうか  
そう出るか…!!

ならば朕も  
当然のことを  
するまでだ!!



私は…



ひとすじに  
想いを定めて  
大願を誓った!!

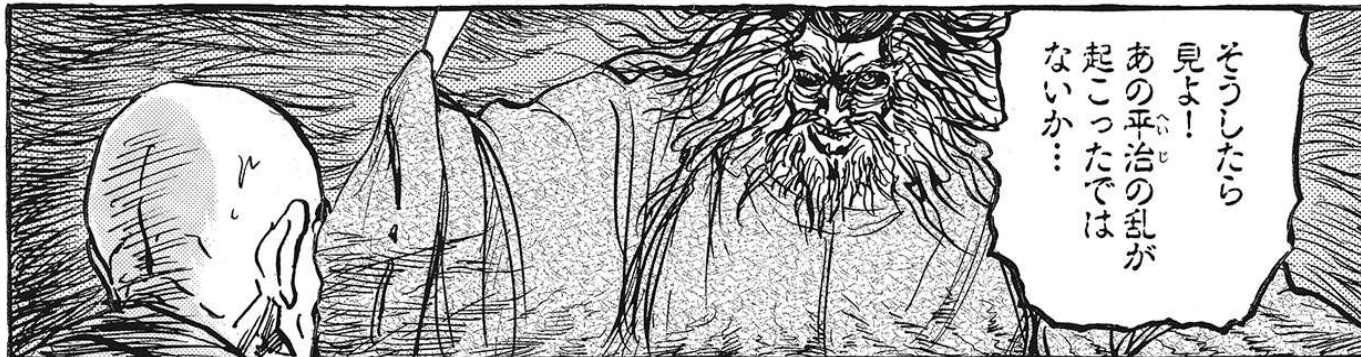
そしてもはや  
何人とも会わず…  
深く閉じこもり



まおう  
魔王となる!!



私は…指の血で願文を書き…  
経に添えて志の海へと  
沈めたのだ…!!



そうしたら  
見よ！  
あの平治の乱が  
起こったでは  
ないか？



源義朝は…父為義を  
はじめとして源氏一族みな  
朕のために命を捨ててくれた中で  
唯一つを引きおった男…



手始めに  
朕はまず  
信頼の出世欲を  
あおり立てて  
あの憎き義朝と  
手を組むように  
仕向けて  
やった！





その後も  
義朝の  
小汚ない策略に  
苦しめられて…  
ついに捕えられて  
この島に流される  
こととなったのだ!!



為朝の勇猛と  
為義忠政の名軍配で  
朕が方の勝利は  
目前であったのに…



その報復のために…  
他でもないこの義朝の心を  
虎狼のごとき残忍さに  
障化させ…信頼の陰謀に  
加わらせたというわけよ!

そして奴らは  
地祇に背いた罪によって  
さして武勇に優れてもいない  
平清盛に破れ—



西南の風に乗じた  
奴の焼き打ちにかかって  
朕は白河宮から落ちのび  
ねばならなくなった!!



そして次には  
博識ぶって他を受け入れぬ  
心のねじけきった奸物  
藤原信西!!

奴の心を誘って  
信頼・義朝の敵と  
なるよう仕向けた!!



これも全て父殺しの  
報いであろう!

天ツ神の祟りを受けて  
身内に謀られて殺された!!



その上で…  
応保元年夏には  
美福門院の命を奪い  
長寛二年春には  
忠通をも殺した!!



後白河院に  
おもねって…  
朕の経を  
送り返させた  
罪をつぐなわ  
せてやったわ!!



ついに捕えられて  
六条河原でさらし首に  
なりおった!!

奴は屋敷を捨てて  
宇治山の抗に隠れたが…



憤りの火は  
死してなお燃え盛り  
尽きることもなく…



朕もその秋に  
この世を  
去ったが…



終いに大魔王として覚醒し…

三百余類の天狗・魔物を  
たばねる首領となつたのだ!!



だがただ一人！  
清盛の奴だけは  
人果に夷まれおって…

親族一族全てが  
高位高官に連なり  
己がままなる政治を  
執り行っておるが…  
それも子の重盛が  
忠義に補佐して  
おるためじゃ！



朕が眷族の為すところ  
人の福を見ては  
福いと転じ—

世の治まれるのを見ては  
乱を起こさせる…！



だがまだ期が  
至らぬまで！  
見ておるがいい  
平氏の命運も  
そう長くは  
ないわ！

雅仁(後白河)が  
朕を辛い目に  
あわせてきた  
その分は最後に  
悪い切り  
報いてやるぞ  
!!



…なんともはや…  
わが君主がここまでも  
強く魔界の悪業に  
つながれて仏土から  
億万里をも遠ざかって  
おいでになるからには…


もうこれ以上何も  
申し上げることは  
ありません…






相模さがみ!


相模!!



なぜ早く  
重盛の命を奪い  
雅仁や清盛らを  
苦しめてやらぬ  
のか!




上皇の命運  
いまだ尽きず  
重盛の忠義心も  
強力で…近付き  
難く—  
ただし支干一周(十二年)  
待てばその時—



重盛の寿命も  
いよいよ尽き…  
奴さえ死ねば  
平氏の幸福も  
この時に終り  
亡ぶ運命…

そうか…ならば  
その時こそ!!



眼下に  
横たわる  
この海で…  
あの讐敵を  
打ち滅して  
くれるわ!!



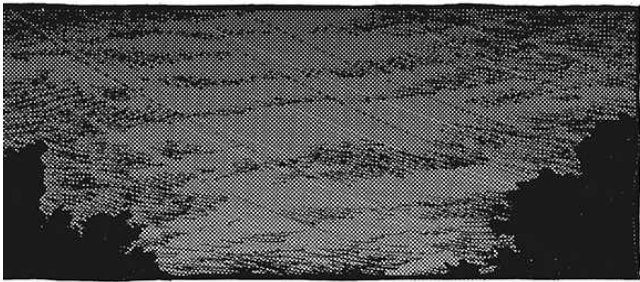
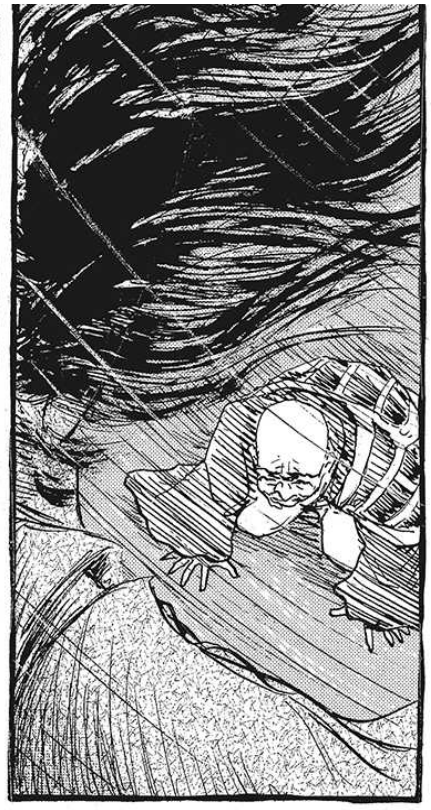
上皇様…



死すれば  
王も奴隷も  
同じであり  
ましよう…！



よしや君  
昔の玉の床<sup>とこ</sup>とても  
か、らん<sup>らん</sup>のちは  
何にかはせん

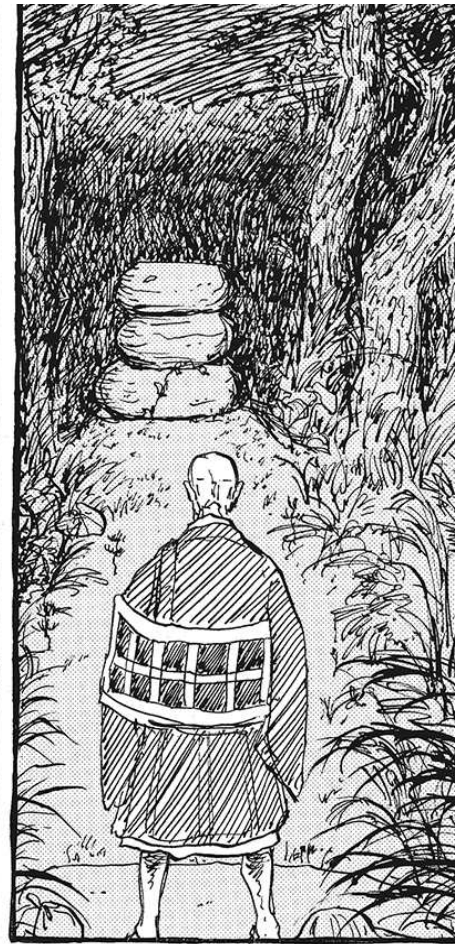




ほどなくして  
白々と明けゆく  
空に――



朝鳥の音が美しく  
鳴きわたり――



だから即  
院が呪ってそう  
させたというご主張が  
真実だという  
ことにはならないが……



他人には  
語るまい……



平治の乱のことより  
始まり……人々の身の上や  
動静、事件の起こった年月にも  
崇徳上皇様の御霊が  
おっしゃったこと……何一つ  
事実と異なるところは  
なかった……

庵にて  
終夜の出来事を  
思いだどつてみると



金剛經二巻を  
読みあげて  
ご供養申し上げ  
てから  
山を下る……







その後十三年を経た  
治承三年（一一七九年）の秋  
平重盛病にかかり  
世を逝ぬ



歯止めを失った  
その父清盛は  
後白河法皇を恨んで  
鳥羽離宮に幽閉し  
福原の粗末な御所に  
移したりと  
大いに苦しめた



東の源頼朝  
北の木曾義仲が  
攻めのぼり  
平氏二門は  
西に逃れたが…



赤間が関  
壇の浦へと  
追いつめられ…



清盛の孫である  
幼き安徳天皇も  
入水して果て…

平氏は滅し



そして西行法師は  
死した後  
歌人として  
名を残した

何一つ  
あの夜の崇徳院の霊の言葉と  
違うことはなかったのである

その後  
荒れ果てていた  
御陵は  
玉をちりばめ  
丹や青に彩られ  
崇徳院の御威光は深く  
あがめられるようにな  
った

今に至るまで

讃岐の国へ通う者は  
必ず幣をささげて  
参拝するべき  
尊い神とされている

